

＜スペシャルオリンピック＞ 大会を支える人々の精神 *The Spirit Behind the Games*

July 1, 2019

By Machiko Arita
374th Airlift Wing Public Affairs

エニス・ケネディー・シュライバー氏がスペシャルオリンピックスを創設したのは半世紀前のことだ。最初は自宅の裏庭を開放して、知的障害がある子供や大人が年間を通じてオリンピック競技種目に準じたさまざまなスポーツトレーニングや競技を行える場を提供したのが始まりだった。シュライバー氏の願いは、障害を持ったアスリートたちに、体力を向上し、勇気をふるい、喜びを実感し、家族や他のアスリート、そして地域の人々と、才能や技能、友情を分かち合う機会を提供することで、やがてその明確な目的を持つ組織を創設した。

スペシャルオリンピックスは何年にも渡って発展しながら、今や世界の174か所で実施されている。そのうちの 하나가、横田基地だ。今年6月1日に40周年を迎えた関東地区スペシャルオリンピックスは、地元地域からアスリートたちを迎え、横田基地の陸上競技場、ジム、プール、ボーリング場を舞台に開催された。その大会でアスリートたちは「私達は精一杯力を出して勝利を目指します。例え勝てなくても、頑張る勇気を与えてください」と宣誓し、純粋な気持ちで競技に挑んだ。

その宣誓を胸に、知的障害の有無にかかわらず人々が共に理解し、受け入れあい、多様性を認めることを促すことで社会を変えるスペシャルオリンピックスは、世界規模の組織だ。

横田基地では、下士官協会が1980年に関東スペシャルオリンピックスを設立したのが始まりだ。40年経った今、知的障害者だけでなく身体障害者もこのスポーツの祭典に招いて、関東スペシャルオリンピックス独自の伝統を継承している。

アスリートはスペシャルオリンピックスの主役だが、40年に渡る成功は、大会を実現するボランティアの存在があつてこそだ。

「これだけの大規模な大会を実現するには、準備が山ほどあり、膨大な時間を要した。集ったアスリートたちに最高の日を過ごしてもらうため、横田基地に所属している米軍関係者と自衛官で構成された50人の関東地区スペシャルオリンピックス組織委員会のメンバーは、一年をかけたこの日のために準備してきた」と今年の大会委員長である第374航空機整備中隊のジョセフ・ストラットン上級曹長は述べた。

「準備はまず、大会を開催するために必要な資金を集めることから始まる。大会を運営するには約2万8000ドルかかり、その資金を集める活動を1年を通し8回行った。その他に、横田基地の他の非営利団体や日本の団体や個人からも多くの寄附を頂いた。運営費用を集めて、ようやく大会や(国防総省の学校から参加したアスリートたちの)大会前の親睦会、大会後の祝賀夕食会を行うことができ、それらのイベントでの食事、シャトルバス、競技器具やイベント用のテントのレンタル、アスリートとその家族やコーチに無償で提供するTシャツ、タオル、帽子等の費用をまかなえる」ジョセフ・ストラットン上級曹長は述べた。

資金が確保できた上でようやく、大会の準備に取り掛かることができた。

「本格的な大会の準備は、アスリートが競技場に立つ7カ月前から始まった。準備は実に多岐に渡った。施設や機材の予約、アスリートが陸上競技場からプールやボーリング場へ移動するためのシャトルバスの調整を第374装備即応中隊と行うこと、第374憲兵中隊とのゲートでのセキュリティ対策の調整、道路の閉鎖、大会当日のボランティア要員確保の調整、関東地区の学校14校と国防総省の学校との調整、航空自衛隊の保安要員やライフガードのボランティア確保の調整、ボランティアやアスリートに配布するTシャツのデザイン決め、そして大会の告知活動などさまざま」とストラットン上級曹長は述べた。

164名のアスリートたちが生涯に残る経験ができるよう、米軍(陸・海・空・海兵隊)と自衛隊(陸・海・空)から成る当日のボランティア約1,100人を纏めるのも委員会の仕事だ。

「全てはアスリートのために、陸・海・空・海兵隊が一丸となった。また私たちの仲間である自衛隊からは620名がボランティアとし



て当日加わってくれた。今回、委員会のメンバーとして運営に関わることで、たった一日の大会にどれだけの労力が注がれているか知ることができた。40年この大会が継続できたのは、特に毎年毎年滞りなく大会が開催できるよう協力してくれる委員会のメンバーの日本人従業員や毎年多くの支援を提供してくれる自衛官、そういう仲間が膨大な時間と努力を注いでくれたことに他ならない」とストラットン上級曹長は述べた。

どのボランティアも自らの時間を捧げる動機はそれぞれだが、ストラットン上級曹長にとって、その動機は身近にあった。

「この大会が円滑に行えるよう、100時間以上の時間をボランティアに充てた。それも、自分が住むコミュニティをより良いものにするために活動することは大切なことだと思うから。私には、二分脊椎で生まれた2人のいとこがいる。私がいとこを他の人とは違うという目で見たことが一度もないように、私は皆にアスリートが何ら私たちと変わらないことを見て欲しかった。私のいとこは障害があることで沢山のことを克服してきた。それは大会に参加したアスリートも同じだと思う。今日は、地域の人々がアスリートたちのすばらしさを知ることができる一日だった。今日、会場に響く歓声を聞いて、競技に参加したアスリートたちは皆勝者だと思うし、みんなそう感じていると思う」とストラットン上級曹長は大会を振り返り、参加した全てのアスリートへ「真のレジリエンシーがどういうものであるかを教えてくれてありがとう。関東スペシャルオリンピックスのスタッフを代表し、来年の大会で再会できることを楽しみにしています」と語った。

※2020年関東スペシャルオリンピックスの組織委員、もしくは短期ボランティアについての問い合わせは、KPSO.Volunteer@gmail.com またはフェイスブック「Kanto Plains Special Olympics」にメッセージをお送りください。